

C-22 南蛮服飾に見る襷袢について — 佐徳川頼宣着用の襷袢の考証 —
埼玉大教育 丹野郁

[目的] わが国に初めて西欧の服飾が到来したのは、^{時代}織豊に始まる、いわゆる南蛮文化の導入によるものであり、このことは、日本人の服飾に対する考え方を変え、衣服の着方・形・仕立て方などに変革をもたらし、南蛮服飾のみならず襷袢は、十六世紀の西欧服飾を特徴つけた主要素であった。これを日本人、とくに武将や商人たちが、異国憧憬と洒落の欲望を満たすべく盛んに用いていたことが、絵画のみならず、最近発見された遺品によって裏付けられる。これらの遺品について史的考察をおこなう。

[方法] 襷袢の着用は、十六世紀末から十七世紀初期にかけて西欧諸国で盛行を極めたにもかかわらず、その遺品は、西欧でも極めて僅少である。そうした中で、和歌山市、紀州東照宮附蔵の佐徳川頼宣着用の襷袢三隻は貴重な資料である。それら三隻について充実に調査を行ない、ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館所蔵のもの、および、スイスのバーセル国立博物館所蔵のものなどと比較検討して、時代考証を行なう。さらに、着装のしかた、形、仕立て方など、また、布地の面でも相違点などを考察する。

[まとめ] 徳川頼宣が大坂の陣で用いたと言われる本遺品は、乍らに、同時期の西欧のものと同様であり、その影響を直接うけていたことが知られる。しかし、仕立て方や布地の面で我が国の特徴が見られる。例えば、その頃わが国では、外来の布地を好んで用い、あるいは、それらを模倣して新しい布地を生産した如く、これらの遺品に用いられている縮緬や紗子はその代表的な例である。着装のしかたも、西欧の襷袢と異なりポイントがけである。襷袢には文化的な多くの要素が含まれているので、本遺品は史的にも注目される。